

洗足学園音楽大学
2021 年度室内楽オーディション
合格者による大学院室内楽コンサート

2022 年 3 月 1 日 (火) 18:00 開演 (17:30 開場)

洗足学園音楽大学 前田ホール

F.プーランク／ソナタ

中山 亜実(Tp) 望月 稜香(Tb) 後藤 陸歩(Hr)

L.ロレンツォ／シンフォニエッタ

石井 優菜(Fl) 間木平 美和(Fl) 府川 悠理(Fl) 山崎 春奈(Fl) 吉村 由望(Fl)

J.M.ダマーズ／フルート、オーボエとピアノのための三重奏曲

河村 真歩(Ob) 村松 紀親(Fl) 見原 さやか(Pf)

— 休憩 —

C.ドビュッシー／弦楽四重奏曲 ト短調 作品 10

濱 萌香(Vn) 成田 叶(Vn) 宍戸 育実(Va) 有馬 憧(Vc)

J.ブラームス／弦楽四重奏曲 第 2 番 イ短調 作品 51

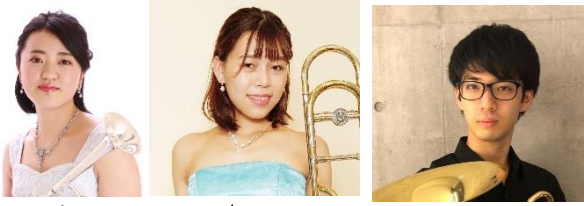
菅野 稚子(Vn) 高橋 沙織(Vn) 加藤 可奈子(Va) 大友美侑(Vc)

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

■ 曲目解説



F. プーランク / ソナタ

プーランクは 20 世紀フランスの作曲家である。1899 年、製薬会社創設者の父と、アマチュアピアニストの母のもと、パリの裕福なブルジョワ家庭に生まれた。20 世紀前半フランスで活躍した、ロマン派音楽や印象主義音楽とは一線を画し、新古典主義音楽に含まれる傾向を示す“フランス 6 人組”の一人としても知られており、声楽、室内音楽、宗教的楽劇、オペラ、バレエ音楽、オーケストラ音楽を含むあらゆる主要な音楽ジャンルの楽曲を作曲している。ピアノ以外の楽器については、弦楽器よりも管楽器の音色を好み、管楽器のための室内楽曲を多く残している。

《ホルン、トランペット、トロンボーンのためのソナタ》は、プーランクの室内楽曲の中で、《2つのクラリネットのためのソナタ》に次いで 2 番目に古い作品であり、プーランクが 23 歳の時、幼馴染のレイモンド・リノッシエのために作曲した作品である。初演は 1923 年 1 月 4 日にパリのシャンゼリゼ劇場にて行われ、当初より好評を博していたが、プーランク自身は 1945 年に本作品を改定している。

チェロソナタを除くプーランクのほとんどの室内楽曲がそうであるように、本作品も短い 3 つの楽章から構成されている。キャシー・ヘンケルは、第 1 楽章 *Allegro Moderato* を舞踏エピソード集、第 2 楽章 *Andante* を第 1 楽章のモチーフに由来する子守歌、第 3 楽章 *Rondeau* を気楽さの増した舞踏音楽によるロンドである、と表現している。また、彼女は本作品を「多様な音色、印象的なリズム、甘美な不協和音、上品な機知」があるとまとめている。優雅さと茶目っ気、予測できない意外性、時としてかすかな感傷が見え隠れするような、理性の上に成り立つバランスの取れた感情的要素はプーランクの作風であり、その作風は、1950 年 7 月のパリのプレス紙において、評論家のクロード・ロスタンから「ガキ大将と聖職者が同居している」と評された。

(○○○ ○○○)



L. ロレンツォ / シンフォニエッタ

イタリアのフルーティスト、作曲家、そして教育者でもあるロレンツォ(1875-1962)。イタリア、ヴィッジャーノに生まれ、8 歳頃からフルートを始めた後、ナポリ音楽院へ進学する。16 歳の時にアメリカへ移住するも、1896 年には兵役に従事するためイタリアへ帰国、ジョヴァンニ・モランツォーニが指揮する軍楽隊に入隊した。フルーティストとして、20 世紀初頭からアメリカ、イタリア、ドイツ、南アフリカ等各国の様々な管弦楽団で活躍した。1907 年、ナポリ、そしてアメリカへと渡ったロレンツォは、グスタフ・マーラー(1860-1911)が常任指揮者を務める、ニューヨーク・フィルハーモニック管弦楽団のフルート奏者となった。その後 1923 年から約 12 年間、イーストマン音楽学校でフルート教授を務め、指導者としても活躍した。作曲は主に管楽器の練習曲から独奏曲、室内楽曲と、晩年に至るまで数多くの作品を完成させた。音楽教育者として教育書も出版している。

フルート 5 重奏の為に書かれた《シンフォニエッタ》は、当時とても珍しい編成ではあったが、後世に多大な影響を与えたこの作品は、やがて基本的な編成として定着していった。副題には、“フルーティストの嬉遊曲”とある。

第 1 楽章 *Mattinata e Fughetta*

澄んだ朝の空気の中、遠くから広がってくるオルガンのような響きは、軽やか且つ華々しい小フーガとなり次々と展開されていく。

第 2 楽章 *Serenata breve a Pan*

牧歌的なこの楽章。アルトフルートの温かみある旋律は、どこか懐かしさを感じさせる。

第 3 楽章 *Allegro finale*

穏やかに終わったかと思えば、突如、流れるような旋律で第 3 楽章が始まる。第 1 楽章の主題が次々と現れ、中間部では舟歌、続いてフゲッタ、技巧的なカデンツァが奏でられた後、最後の盛り上がりを見せ幕を閉じる。

(○○○ ○○○)



J.M.ダマーズ／フルート、オーボエとピアノのための三重奏曲

ジャン＝ミシェル・ダマーズ(1928-2013)は、フランスの作曲家・ピアニストである。幼少期から作曲を始め、13歳でパリ音楽院に入学し、後に副学長も務める。彼の作品は器楽を用いた室内楽曲が多く、当時の主流だった前衛音楽に反して、新古典派主義音楽に基づく優美な旋律を特徴とする作風である。そして彼特有の明快な旋律と、独特の店長が一丁してダマーズの曲だとわかる個性がある。そのため、当時はなかなか受け入れてもらえず苦労していたが、近年では評価されて演奏される機会も増えている。

フルート、オーボエとピアノのための三重奏曲は、彼が41歳の時に作曲された。この作品は4楽章で構成され、各楽章の主題が互いに関わりを持っている。

第1楽章、序奏部主題はピアノの重々しい4度累積和声上にフルートとオーボエが同調し、現代的な響きであり、続く Allegro は主要主題は軽快なピアノの滑らかな分散和音に乗って、フルートとオーボエが4度音程を意図した近代的な旋律を模倣し、同調しながら綺麗な主題の数々を奏でる。後奏部では主題一部分が再現され、最後は静かに序奏部動機断片で終わる。

第2楽章はピアノの行進曲風の付点音符動機から始まり、フルートとオーボエが主題を同調し、ピアノの右手の装飾楽句と対話する。中間部はオーボエのソロで牧歌風旋律を奏で、フルートに引き継がれ、最後は第1楽章の変奏主題でフルートとオーボエが同調し曲を閉じる。

第3楽章は4度音程の軽妙な主題が各楽器に引き継がれ、ロンド風に3回現れ、その間を縫って優美な複数の副主題が色彩豊かに対比しており、結尾は第1楽章冒頭動機が終曲への示唆を告げ、それを受けて第4楽章 Moderato 序奏部では第1楽章序奏主題が再び重々しく奏される。主要主題 Andante はさざ波のように様々に美しく変化するピアノの伴奏音形にフルートとオーボエが対話し、中間部は第1楽章の主題が現れる。後半部は第3楽章中間部主題が変奏され再現し、最終結尾では序奏部動機が拡大されて現れる。

(○○○ ○○○)



C.ドビュッシー／弦楽四重奏曲 ト短調 作品10

ドビュッシーは1862年に生まれた。10歳でパリ音楽院に入学し、ピアニストへの道へと進む。途中から作曲を始めるが、作風が時期によって変化している。短長二元論に疑問を抱き、10種類の音階を使い、色彩豊かな音楽を目指した。

この曲は1893年に作曲された。同年12月29日にパリの国民音楽協会にてイザイ四重奏団によって初演されたが、評価は賛否両論だった。循環形式によって各楽章が関連付けられている点に、ドビュッシーが敬慕したセザール・フランクからの影響がみて取れる。全般的に旋法的であるうえに、ホモフォニックな傾向で、しばしばグリーグの弦楽四重奏曲が刺激になったと指摘されている。ほかにも、ボロディンらの影響も見受けられる。

第1楽章

「活気を持って、きわめて決然と」は強烈なフリギア旋法の主題によって始まる。これは後々の全ての楽章に調や形を変えて登場する主題であり、先述の1890年に他界した巨匠フランクの特徴である循環形式の影響が見て取れる。不協和音的な不思議な響きが続き、徐々に高揚していく。

第2楽章

「十分に生き生きと、リズムカルに」となっており、冒頭からピチカートでつま弾く弦の音が鳴るとその上をヴィオラが主題を奏する。この循環形式の素材はオスティナートのように他の楽器にも繰り返し現れる。

第3楽章

「アンダンティーノ、穏やかで表情豊かに」は、短い序章の後に続く、静謐を湛えた美しい主題が印象的な第1部、ヴィオラから始まるレチタティーボ風の第2部、高揚感と豊かな情感を漂わせる第3部からなる、三部形式の緩徐楽章。

第4楽章

「非常に中庸に」の序章と、「非常に動きをもって、情熱的に」の変化に富む3部からなるフィナーレ。半音が気怠い印象を抱かせる序章から始まり、その後基本の主題が変形された2つの主題によって展開していく。コーダ部は基本主題が抒情的に、その後活発なリズムで再現され華々しく閉じられる。



J.ブラームス／弦楽四重奏曲 第2番 イ短調 作品51

ブラームスは、その生涯で弦楽四重奏曲を3曲しか残していない。実際には、op.51である第1番と第2番を発表する以前に、少なくとも20曲以上の弦楽四重奏曲を作曲していたと言われている。しかし、自己批判のきびしいブラームスにとって満足できるものではなく、発表するには至らなかったのだ。

ブラームスは、ベートーヴェンに対して畏敬の念を抱いていた。《交響曲第1番》を発表するまでも、ベートーヴェンを意識するあまり21年もの歳月を要した。それと同じく弦楽四重奏曲でもベートーヴェンのものと比較して、自分の作品に不足を感じずにはいられなかったのだろう。弦楽四重奏曲は古典派の人たちによって、高度成長をとげたのであり、形式と内容の面からみてロマン派以降の人たちから敬遠されがちな曲種であったとも言えるようで、自由な編成でその中に合った色彩の中で自分の幻想を羽ばたかせることを好むようになった。ブラームスも弦楽四重奏曲より他の編成のものに興味を向ける傾向をみせていた。そんなブラームスが満を持して発表した3曲の弦楽四重奏曲は、緻密な構成と深い内容をもっている。第2番は、第1番のベートーヴェンを意識した力強い曲風とは対照的に、対位的に書かれているところがバッハに接近していたり、のびのびとした楽想となっており、ところがシューベルト的であったりする。

第1楽章の冒頭では主題をAFAEからはじめている。これは、ヨアヒムのモットーであるFAEから考えついたもので、「Frei aber einsam」「自由に、しかし孤独に」の音名化にもとづいている。また、この頃ブラームスは《ハンガリー舞曲集》の第1集と第2集をまとめあげていたという影響もあるのか、第2楽章の途中や第4楽章にはハンガリーのジプシーの音楽のようなところがある。

(菅野 稚子)